

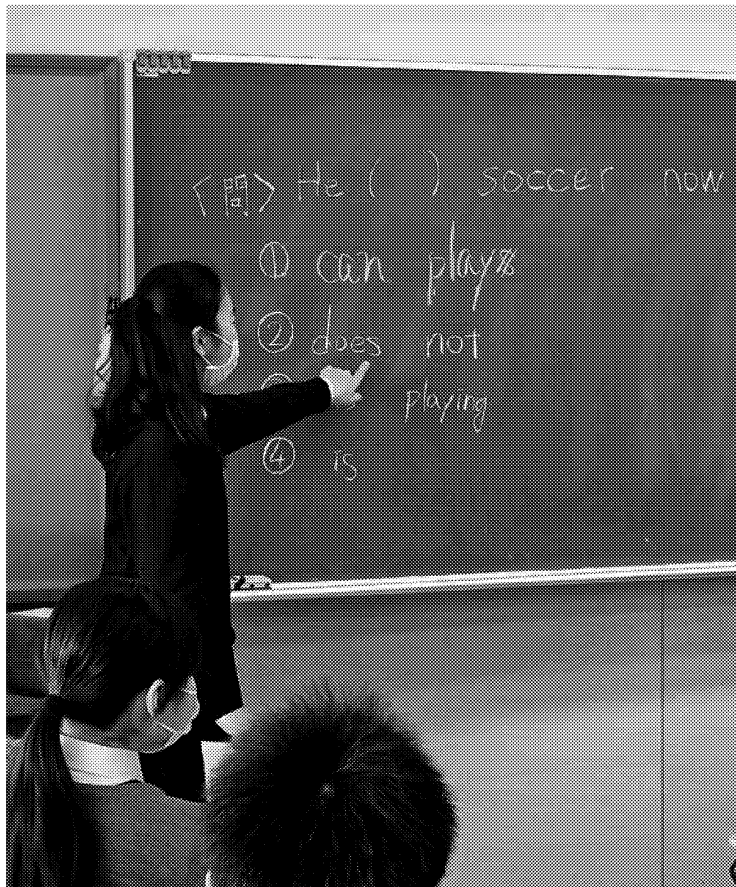
生徒に問題を作成させる学校が増えている。千葉県の中学校では生徒が英語の文法問題を作って同級生に解き方を教えているほか、横浜市の高校は定期試験で「作問」を出題する。問題作成は深く理解することにつながるほか、授業が活発になるという効果がある。指導要領改訂に合わせて導入が進む「対話的で深い学び」の一つのスタイルになるか――。

## 中学の授業 対話力も磨く

「He ( ) soccer now. カッコの中は何が入るでしょう?」。千葉県市川市の日出学園中学1年の教室。大貫紗弥さん(13)は黒板の前に立って問いかけた。正答が出た後も同級生たちに「なぜ他の選択肢は誤りだと思いませんか?」と続けて尋ねる。解説する言葉が詰まると、教室の隅に立つ教員が助け舟を出す。授業後、大貫さんは「問題作りは頭は疲れるけど、面白い。考える力が強くなっている気がする」と話す。

同中学では予備校講師出身の石川茂・入試広報部長

# 生徒が先生役 作問して解説

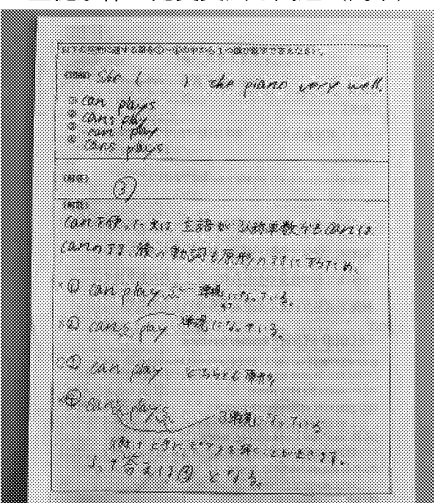


## 質問活発に ■ 試験に導入も

授業中の質問や発言が活発になる効果もある。「先生役を生徒を困らせるような質問が出るかと思えば、その生徒をフォローするよくな発言も出る」(石川部長)という。

桐蔭学園高校(横浜市)は男子部理数科の数学の授業で作問を16年度から取り入れている。前の授業の復習をした後、まず一人で、次にグループで複数の問題を作る。教員がグループを

自作の英文法問題を解説する日出学園中1年の女子生徒(写真上)と、生徒が作った英文法の問題(同下)



が中心となり、2015年度から本格的に英語の文法などで生徒に問題を作成させる授業を実施している。50分の授業時間を2つに分割し、前半に教員が知識を教え、後半に生徒が作成した問題を解き、生徒に解説も任せる。

問題作りは宿題にしている。出題範囲や難易度などは自由で、「皆の前に立つて解説する準備をするように」と伝える。兄や姉の問題集を参照して少し背伸びをした問題を作ってくる生徒もいる。石川部長は「それまで成績が良くなかった生徒が良い問題を作ることもある。成績が伸びるきっかけになることもある」と手応えを語る。

問題作りは宿題にしている。出題範囲や難易度などは自由で、「皆の前に立つて解説する準備をするように」と伝える。兄や姉の問題集を参照して少し背伸びをした問題を作ってくる生徒もいる。石川部長は「それまで成績が良くなかった生徒が良い問題を作ることもある。成績が伸びるきっかけになることもある」と手応えを語る。

### 学力の自覚・知識定着に効果

教育方法学に詳しい田中博之・早稲田大教授の話。国際学習到達度調査(PISA)の成績で上位常連のフィンランドでは作問は低学年の授業から導入されている。それも単純な計算問題だけでなく、文章題や図を使った問題を作らせている。そういう思考力や表現力を養う作問は、まだ日本では一般的でない。

作問には学力を自覚したり、知識を定着させたりする効果がある。問題の解法を人に説明できる時に初めて「わかった」と言える。8割くらいの理解度で問題を作ると「あれ、自分はわかっていないな」と気がつく。それでもう一度学び直すと、知識が定着していく。

対話的な学びにもつながる。例えば、先生よりも友達に教えてもらう方がより頑張る生徒もいる。教え合えば互いに感謝の気持ちも生まれるだろう。時間の確保は課題だが、子供たちの学びを社会的なものにするという意味では、放課後に10分だけ実施しても一定の効果がある。

問題を作れるよう、宿題を真面目にやっていると「なった」という。

同校は定期試験で「問題作成」を出題している。作成した問題の難易度レベルに応じて点数が変わる。同教員は「採点の時に一つ一つ問題を解くのに莫大な時間がかかる」という難点があるが「これを行うと単元の定着度がとてもよく分かる」と強調する。

一方で授業に取り入れるとなると時間の確保が課題だ。桐蔭学園高校は丁寧に予習範囲を指示し、宿題も多めにしている。数学が得意な生徒が多い理数科ならではの対策といえる。

日出学園中学は学習量に比較的余裕がある中学1年の授業で作問を取り入れている。「失敗を恐れず、まずやってみることだ」と同中学の石川部長。学習効果をあげるためには現場でのノウハウの蓄積が求められそうだ。